

## ライフステージに応じた切れ目のない支援について

～アーチルにおける相談支援の現状から～

### 1. アーチルが目指す「生涯ケアの実現」の視点

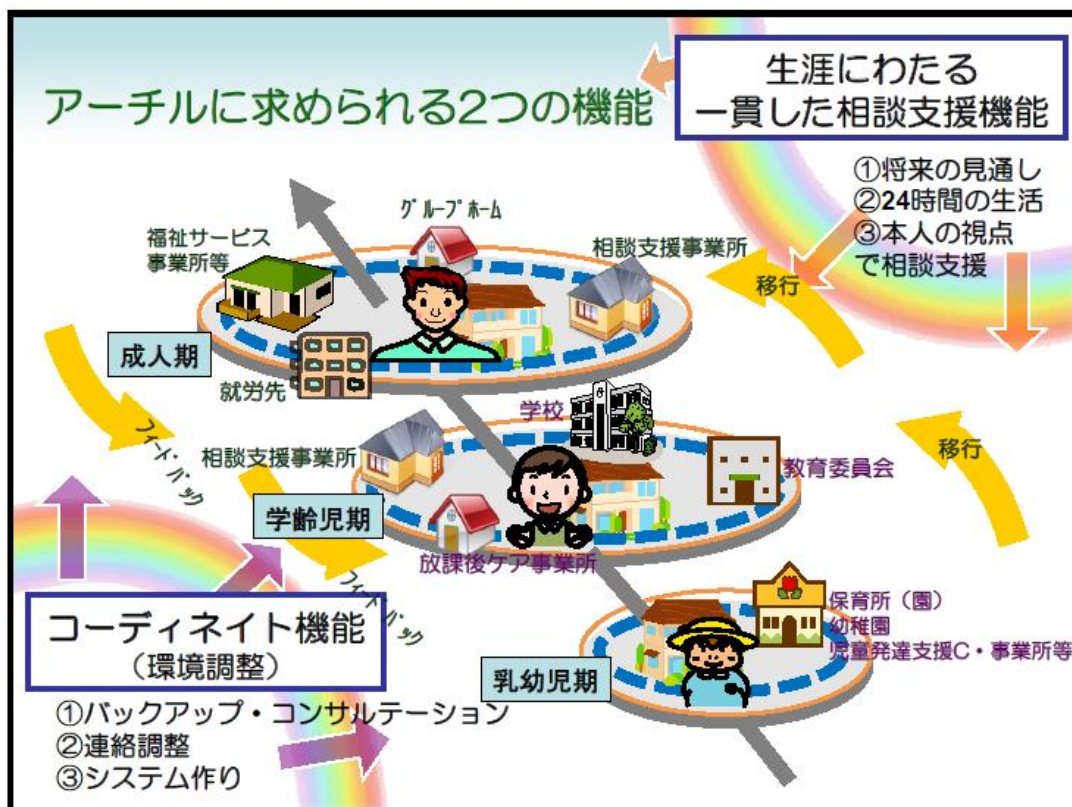
- 「生涯ケアの実現」は、通常「生涯にわたり一貫性・継続性をもって支援を行うこと」を意味し、誕生から成人期に至るまで、その時々で必要な支援を途切れなく届けること。
- 本人主体の視点で重要なのは「生涯にわたり一定の支援を受け続けること」ではなく、「本人の安定した状態がライフステージで途切れなく受け継がれ、地域生活が生涯にわたり維持されること」
- 本人の状態によって支援内容や程度・頻度も変動するため、状態に合わせた支援方針の見直しが必要となり、支援全体のコーディネート役を担う支援者の役割は大きい。

### 2. アーチルにおけるこれまでの取り組み

#### (1) 生涯にわたる一貫した相談支援

アーチルでは、初回相談にあたる「生涯ケアの入り口の相談支援」と、進路選択等のライフステージの節目毎のニーズに対応する「発達の節目の時期の相談支援」の継続的な支援により、生涯にわたる一貫した相談支援（＝直接支援）を実現している。

(図1)



## (2) システム全体のコーディネート

直接支援と同時に、アーチルでは次の3つの機能を果たすことにより、本人や家族、関係機関と連携・協働しながら課題解決にあたる間接支援にも取り組んでいる。

### ① 関係機関のバックアップやコンサルテーション

本人や家族の抱える課題が複雑化で多岐にわたるため、それに対応する支援者や関係機関等において課題を解決するための糸口を見出せるよう、関係機関等のニーズに応じたバックアップやコンサルテーションを行う。

### ② 合意形成を図るための連絡調整機能

立場の異なる支援者・関係機関が市の進める障害者ケアマネジメントによる支援について共通課題と認識すること、関係機関どうしの調整や目標達成に向けた合意形成を図るための連絡調整の機能を担う。

### ③ 共通課題の解決に向けたシステム作り等

個別の相談支援を通して見えてきた発達障害児者支援共通の課題の把握と、それらの課題解決に向けた施策化・事業化など、社会資源の開発やシステム整備等を行う。また、それらのシステムの担い手の育成に向けた仕組みづくりの検討を行う。

## (3) 一貫した支援をサポートするためのツール

### ① サポートファイル「アイル」

乳幼児期から成人期までの一貫した支援を可能とするために、子どもの状態や必要な支援内容、養育に関する保護者の思い等を保護者と支援者とが協働で作成・ファイリングしたもの。平成16年度から使用していたが、平成26年度からは一部内容を変更し、教育委員会と連携し、ファイルの活用推進に取り組んでいる。

### ② 学校との「連絡票」

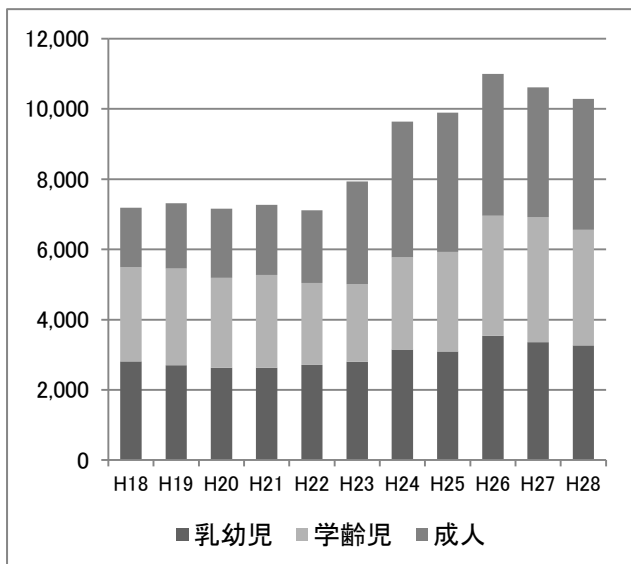
児童・生徒の様子や支援方針等を学校、保護者、アーチルとの間で共有し適切な支援を行うため、保護者を通して学校とアーチルとの間で「連絡票」のやり取りをしている。現在は主に学校からアーチルの新規相談につなぐ場合に利用している。

### 3. 発達相談の近年の動向

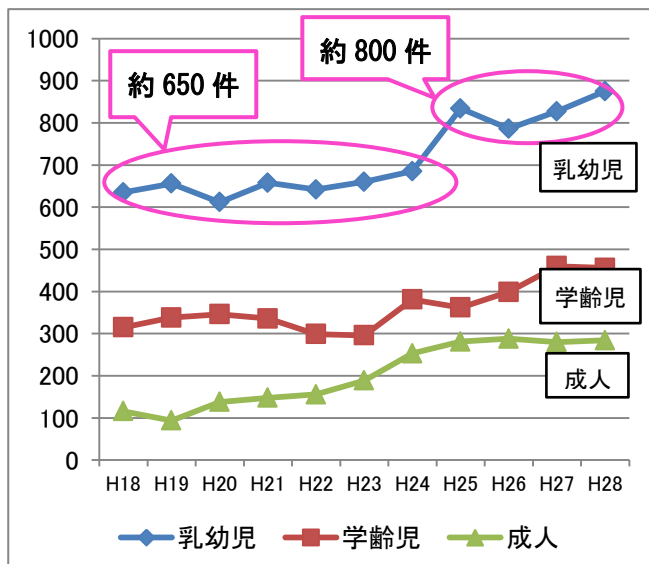
#### (1) 相談件数の増加とニーズの多様化

アーチルの相談件数は年間1万件を超え、平成14年度の開所以降、増加の一途を辿っている。特に乳幼児の新規相談は、南部アーチル開所を境に格段に増加した。

対象者の障害種別や障害程度も多岐にわたってきており、知的障害を伴わない事例の相談や明確に発達障害と分類しにくい事例の相談も増加している。



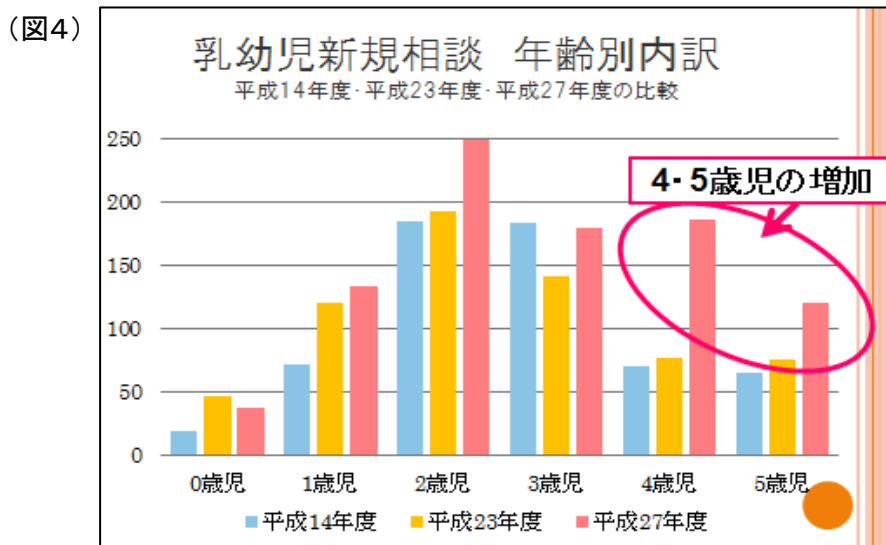
(図2) 相談件数(ライフステージ別)



(図3) 新規相談件数推移(ライフステージ別)

#### (2) 幼稚園や保育所等の既に在籍のある児童の相談の増加

乳幼児の新規相談では、初回相談後アーチルの初期療育グループとこれに続く親子通園を経て、幼稚園や保育所等へ移行するケースが殆どだったが、近年は既に在籍のある児童が、集団の中で発達面の不安から相談来所するケースの増加が顕著である。



(図4)

#### 4. アーチル連絡協議会における議論

平成 28・29 年度のアーチル連絡協議会では、「未就学児とその家族の相談支援体制の充実をめざして」をテーマに、就学前の発達障害児を取り巻く現状と課題、望ましい支援や仕組みのあり方等について検討を行っている。

##### (1) 発達障害児を取り巻く現状と課題等

###### ① いわゆる「グレーゾーン」の児童の増加

知的障害を伴わず、かつ発達特性があまり明確ではないものの、幼稚園や保育所、さらには小学校の通常学級などの集団生活に入ってから「気になる子」としてアーチルに相談来所するケースが増加している。

- ・相談件数の増でアーチルでの初回相談までの待機期間の短縮が困難
  - ・地域で対応できる相談や療育の担い手の確保・人材育成が必要
  - ・幼稚園や保育所等在籍児への療育支援が不足

###### ② 複合的な課題を抱えるケースの増加

複雑な家庭環境や養育上の課題を抱える家族が増加している。また、家族の介護や精神障害等さまざまな課題を抱える親、東日本大震災の影響で課題を抱えた子どもなど、支援にあたっては総合的な視点が求められるケースが増加している。

- ・多機関との連携強化や複雑化する課題に対応できる支援者の確保・人材育成が必要
  - ・専門医の確保や医療情報の提供等医療との連携強化が必要

###### ③ 気づきの段階から、アーチルの相談につながるまでの本人と家族に対する支援

アーチルの相談まで数か月かかり、その間も日々成長する子どもへの支援や、苦悩する親へのフォローが必要。身近で気軽に相談できる「居場所」がもっとあればよい。

- ・障害児支援施設や子育て支援施設の役割の見直しや連携強化が必要

###### ④ 地域とのつながりの希薄化

地域や隣近所との付き合いが希薄で孤立しやすい育児環境にある。情報過多で知識豊富だが、実際の子どもの姿に合わせた関わり方がわからず、不安や焦りから相談に来所する保護者も多い。

- ・障害の有無に関わりなく、身近な場所で気軽に子育ての話ができる交流の場が必要

##### (2) 発達障害児と保護者を支えるために必要な視点

アーチル連絡協議会の中では、障害の有無を問わず、一人の「子ども」として捉え、関係機関が連携して支援していくこと、特に、「子育て部門」と「障害部門」が連携を強化し、より一層の協働を深め、「オール仙台」で取り組むことの必要性が確認された。また、発達障害児と保護者を支えるために、次の5つの視点からの支援が必要であることが共有された。

【必要な視点と連携のための各委員からの意見・提案（抜粋）】

|                  |   |
|------------------|---|
| ①子育て支援・<br>家族支援  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ライフステージをバトンを渡してつないでいくというよりも、支援のコアとなる人がいて、必要に応じて伴走者が増えていくという連携を構築することを提案したい。</li> <li>・きょうだい児への関わりから、地域の子育て支援機関とのつながりを作っていきたい。</li> </ul>  |
| ②安心できる<br>居場所づくり | <ul style="list-style-type: none"> <li>・児童発達支援センターと子育て支援センター、幼稚園・保育所等との協働により、地域で敷居の低い相談を可能にしていきたい。</li> <li>・気軽に行けるプレイルームのような場所で子どもの発達相談ができ、親の心のケアが図れる場がもっとあるとよい。</li> </ul>  |
| ③縦の連携・<br>横の連携   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・中学校区ごとに1か所基幹事業所（幼稚園・保育所・児童館・放課後等デイサービス事業所・学校等）を決め、地域の子どもとその家族の課題を共有し解決していく機会を作る。</li> <li>・フィンランドの「ネウボラ」（妊娠・出産時から継続的・包括的に本人・家族を支援する子育て支援施設・施策）を参考にしているかどうか。</li> <li>・児童館から子どもの様子を学校へ伝えるようにしていたら、逆に学校から児童館に情報提供されることが増えてきた。更には学校と一緒に保育園へ訪問している。各機関ができることをそれぞれが主体的になって取り組んでいけばより良い連携ができるはず。</li> <li>・小中学校のコーディネーター連絡会が中学校区ごとに開催されているので、この場を活用して地域の子育て資源等が参画していければよい。</li> </ul> |
| ④人材育成            | <ul style="list-style-type: none"> <li>・人的なスタッフの増員も必要だが、問題の芽を見逃さない目を持つ職員の育成、研修も大事。</li> <li>・縦横のつながりができるかどうかは一人ひとりの職員の資質にもよるのではないかと思わされた経験をしたことがあった。</li> </ul>   |
| ⑤地域への<br>理解・普及啓発 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・グレーゾーンの子を持つ親は、子育てと障害の間でいつも不安を感じている。小さい頃から、色々な子ども、さまざまな人がいるということが自然に受け入れられる環境を整えたい。</li> </ul>   |

5. 各ライフステージにおける支援の現状と課題 【参考資料1】

- 乳幼児期から学齢期、義務教育終了後までのライフステージに応じた各種資源は子育て・教育・障害福祉など各関係機関がそれぞれに取り組んでいる。
- 切れ目のない支援のためには、各ライフステージのつなぎ目にあたる「連携の場」「情報連携のためのツール」「コーディネートする人」の役割が重要であり、それらの現状や課題を明らかにし、現状のシステムに課題があればその解決に向けた取り組みが必要。
- ライフステージの縦軸を通す「縦の連携」とともに、関係機関同士が相互につながり障害児とその家族を包括的に支援する「横の連携」も重要。障害福祉・子育て・教育の各部門間での連絡会や協働事業など行政内部での連携、中学校区単位での地域の支援者同士の顔の見える関係づくりなど横系を通す仕組みづくりが求められる。また、関係機関はそれぞれの役割のもとに互いに重なり合い、重層的に支援していくことが必要である。